

神と共に歩む人生

ヴァルヘルム・ブッシュ
(8回連載、第3回)



第三章 神はなぜ沈黙なさるのか

この世では多くの悲惨なことが起こります。一九三七年に私はエッセンという町に住んでいました。そこである時、教会の青年会に来ていた十六歳の少年がうろたえ、取り乱しているところに出くわしました。どうしたのかと尋ねると、彼は言いました。「母がユダヤ人だったので私は病院に連れて行かれ、身体中を消毒されました。そして家に帰ったら両親がいないのです」。それ以来、彼は両親に会うことができませんでした。母親は強制収容所に収容され、父親は逮捕されたのです。私は彼のために、急いでオランダの知人経由でアメリカへと亡命させる手立てをつめました。私はこの少年が絶望して取り乱していた顔を一生忘れることができません。当時はこのような悲惨な事態が数多く発生したのです。そのような時、神を信じていない人々はよく「神はいったい何

を考えているのか。なぜ黙っているのか」と言います。

また、悲惨な事件がケルンで起きたこともあります。精神障害者が小学校に火炎放射器を持って押し入り、十二人もの子どもたちを殺害したのです。このような時、多くの人々は「神はいったい何をしているのだろう。なぜこのようなことを見過ごすのだろう」と思っています。あるいは、若い女性がガンになり、ひどい苦痛の中で愛する子どもたちを残して死んでいく、というようなケースも身近に見聞します。そのような経験をすると「神はなぜ沈黙しているのか」と思ってしまうこともあるでしょう。過酷な体験をした時、人は「神はどこにいるのか。なぜ沈黙しているのか」と叫びたくなります。

このように「神はどこにいるのか。なぜこのようなひどいことを黙って許しておくのだろう」という疑問が浮かぶと、あなたは次第に「もしかしたら神など存在しないのではないのか？天国は空っぽなので

はないか？無神論のほうが正しいのではないか？」という危険な考えにとりつかれるかもしれません。

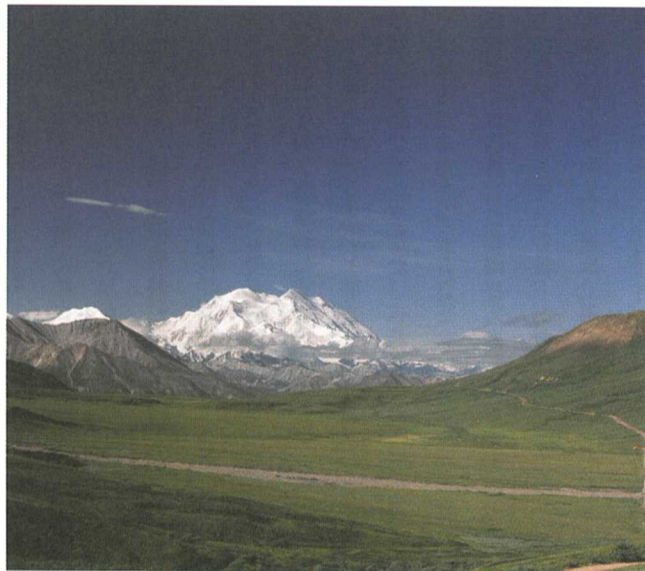
しかし、もし神が存在しないのであれば、私たち人間は見捨てられたことになります。道に迷った子どものように、家に帰ることができなくなります。私たち人間だけがこの地上に捨て置かれてしまうなら、それは何と悲惨なことでしょう。

神を持たない人間にとって、他の人間ほど恐ろしい存在はありません。ローマには、「人は、他の人にとって狼である」という諺があります。

私は長年牧師をしていて、たびたび次の質問を耳にしてきました。「なぜ神は多くの悲惨なことを許され、沈黙しておられるのか」。その質問にこの章でお答えしたいと思います。もちろん私は、神のご計画をすべて知る者ではなく、また神を正しく理解している者でもありません。ですから正しい答えは、ただ聖書の中のみ求められます。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。

(イザヤ 55:8)



根本的に誤った問題提起

最初にはっきりさせておきたいことは、「なぜ神は沈黙しているのか」という質問は「逆転した立場」から出ているということです。この質問はまるで人間が法廷で検事席に立ち、被告人席の神に詰問しているかのようです。つまり私たちが被告である神に向かつて、「あなたはなぜ沈黙し、この世のひどいことを許すのか」と言っているかのようです。このように、人間に告発されて被告席につくような神は存在しないのです。

私は二十七歳の時、牧師としてエッセンという町に赴任しました。そこで鉱山労働者の大きなストライキが勃発しました。一人の男が群衆の真中に立って、子どもたちの飢餓、資本家の搾取、失業の不安について大声で叫んでいました。彼はそこにいた私を見るなりどなり始めました。

「その牧師さんよ、もし神が本当にいるなら、私が死んで神の前に出た時に、なぜこんな悲惨なことを許したのか、なぜ子どもたちを飢え死にさせたのか、なぜ人間がガンで苦しんで死ぬのか問い詰めてやる。そのような神はいらない、立ち去れ、と言ってやるよ」。そこで私も叫びました。「全くその通り。そのような神は立ち去ればよい」

突然その場はシーンと静まり返り、話していた男は驚いた顔で言いました。「ちょっと待った。あなたは牧師だろうが。そんなことを叫んでもよいのか」。それに対して私は答えました。「先ほどからあなたが非難している神、あなたが判事になって詰問している被告人の神は、あなたの想像上だけに存在する神に過ぎないのです。私はそのような神に対しては『消え去れ』としか言えません。私たちの時代が勝手に作り、勝手に被告人扱いし、都合によっては責任を追及したり、ある時には無視したりする

ような、そんな都合のいい神はおられません。ただし、そうでないまことの神は厳然として存在しておられます。真実の神の前ではあなたが被告人です。そしてそのお方の前ではあなたは口を開くことも許されないのです。あなたはその神に質問されるでしょう。『おまえは、なぜわたしをあがめないのか。なぜわたしに呼び求めないのか。なぜきよくないまま生きてきたのか。なぜ嘘をついたのか。なぜ人を憎んだのか。なぜ争ったのか』と。その時、あなたはことばに詰まり、何一つ答えることができないでしょう。人間が『立ち去れ』などと言えるような神は存在しませんが、私たちにに対して『立ち去れ』と命じられる神、聖い、生けるまことの神は厳然として存在しておられます」。ですからもし誰かが神を非難し、「なぜ神はこのようなひどいことを黙って許されるのか」という質問を耳にしたら、すかさずこう言っていたきたいのです。「私たちが

非難し、訴えたつもりの相手は、私たちの想像が生んだ神、実在しない神です。聖なる真実の神はただお一人であり、その方は私やあなたを非難し、訴えることができるお方なのです」と。

あなたは神が定められた律法を守っていますか。また、神の律法をどのように考えていますか。神は、ご自分が定められた律法を、真剣に、厳密に守るように私たちに求めておられます。ですから、訴えられるのは神ではなくてむしろ私たちなのです。私たちが被告人なのです。

まず第一に、このことが明らかにされていないければなりません。つまり、「神はどこにいますのか」という問題提起そのものが、根本的に間違っているのです。次に、第二の問題点に移りましょう。

神の沈黙は、神の裁きを意味する

なぜ神は沈黙されるのでしょうか。確かに神はしばしば沈黙しておられるかに見えます。しかしその沈黙は、実は私たち人間に対しての最も恐ろしい裁きなのです。

私は天国が実在することを確信しています。また、地獄も実在します。その地獄とは子どもだましの絵に描かれているようなものではなく、「神が人間に對して何も語られなくなった状態」、それこそが地獄なのです。その時、人々がいかに叫び求めても、いかに祈っても、神はもはや答えようとはなさいません。かつてロシアの小説家ドストエフスキーは言いました。「地獄とは、神が私たちに全く目を向けてくださらない所だ」と。つまり地獄とは、「われわれ人間が、神から全く無視され、忘れ去られてしまった状態」なのです。神の沈黙は裁きを意味します。従っ

て、神が沈黙されるその時に地獄は始まるのです。

ここで旧約聖書の創世記19章から次の話を紹介したいと思います。その昔、ソドムとゴモラという二つの町がありました。どちらも繁栄した町でしたが、神を畏れず、神の律法に従おうとしないそれらの町は、神の目から見ても不法と姦淫の町でした。神はその町を滅ぼすために二人の御使いを遣わしました。けれども、町の人々はその御使いをひどい目に会わせようとしたのです。ただ、町の中で信仰のあついロトだけは、この二人の御使いを必死でかばいました。猛り立つ群衆を、自分の娘をいけにえに差し出してまで、なだめようとしたのです。それを見て御使いは、「家族を連れてこの場所から立ち去りなさい」とロトに勧めました。「私たちはこの場所を滅ぼそうとしてやって来たのだから」。ロトが家族を連れて町から逃れた時、神はソドムとゴモラの町の上に硫黄の火を降らせました。二つの町は周りの低地ごと、住民

も動物も植物も根こそぎ滅ぼされてしまいました。

余談ですが、私たちは第二次世界大戦中に同じようなことを経験しました。敵の航空機による爆撃です。しかし、万能の神は、空襲とは比較にならない力と規模をもって火や硫黄を降り注ぐことができるお方です。ソドムとゴモラの人々は驚いて地下室へ殺到したことでしょう。しかし、そこは既に高熱となつて燃え盛っていました。人々は助かろうと必死で外に飛び出しましたが、外にも火と硫黄が降り注いでいました。逃げ場を失った人々は、恐怖の中で神が実在し、人間が神を無視し逆らい続けるなら、神はある時から厳しく扱い、すべて滅ぼしてしまうことのできるお方であることに気づきました。そこで彼らは神の憐れみを叫び求めました。しかし遅すぎました。その祈りにも叫びにも、もはや神は答えようとはなさいません。ソドムとゴモラに対するこの沈黙こそ、神の最も恐ろしい裁きでした。神は、

彼らがもはや何を言っても真実の神に従わなかったことを責めておられるのです。この状況は今日の世界と酷似しています。私たちの周囲には、神の愛、神の救い、神の律法、神の義に対する全くの無関心がはびこっています。それは大変恐ろしい状態です。私たち人類は今すぐ滅ぼされても当然の、墮落した存在になっています。恐ろしい火によって焼き尽くされるのが、今の世界のどこで起こっても不思議ではありません。これは単なる空想ではありません。ある日、あなた自身が体験するかも知れないのです。祈っても叫んでも、もはや神が何も答えてはくださらないという絶望的な状態、これこそ神の沈黙による裁きです。聖書には次のようなみことばがあります。

わたし(神)があなたがたに絶えず、しきりに語りかけたのに、あなたがたは聞こうとせず、わたしが呼んだのに、答えもしなかった。(エレミヤ 7・13)

神が人々に懸命に呼びかけてこられたのに、人々はそれに答えようとせず、無視してきたのです。そしてそれこそが、恐ろしい神の沈黙を呼び起こす原因です。神の沈黙は神の究極の裁きです。

三番目に私が言いたいのは、次のことです。

遠く離れていることが、 聞くことの妨げとなる

神が沈黙しておられると思う時、それはあなたが余りにも神から遠く隔たっているということが一つの原因です。

最近、ある青年と次のような話をしました。「ブッシュさん、私の目には神は見えないし、声も聞こえません。神はいったいどのようなようにして私たちに話しかけられるのですか？」そこで私は新約聖書ルカの福音書15章にある放蕩息子の話を紹介しました。

「ある裕福な地主に二人の息子がいました。ある日、その弟が父親に言いました。『お父さん、私に財産を分けてください』。そこで父親は彼に財産を分け与え、息子は出て行きました。そしてその息子は放蕩して湯水のように財産を使い果たしてしまいました。その頃大飢饉が起こり、彼は食べるにも事欠くようになり、ついには豚の世話をするまでに落ちぶれました。当時のイスラエルでは豚は不潔なものともみなされ、イスラエル人にとって豚の世話をするのは最悪の仕事だったのです。しかしその仕事は、この大飢饉の時代、飢え死にしないで済む唯一の手段でした。彼はあまりにも遠く家から離れていたので、心配した父親が呼びかける声が届きませんでした。しかしある日、彼は我に返って次のように言うのです。

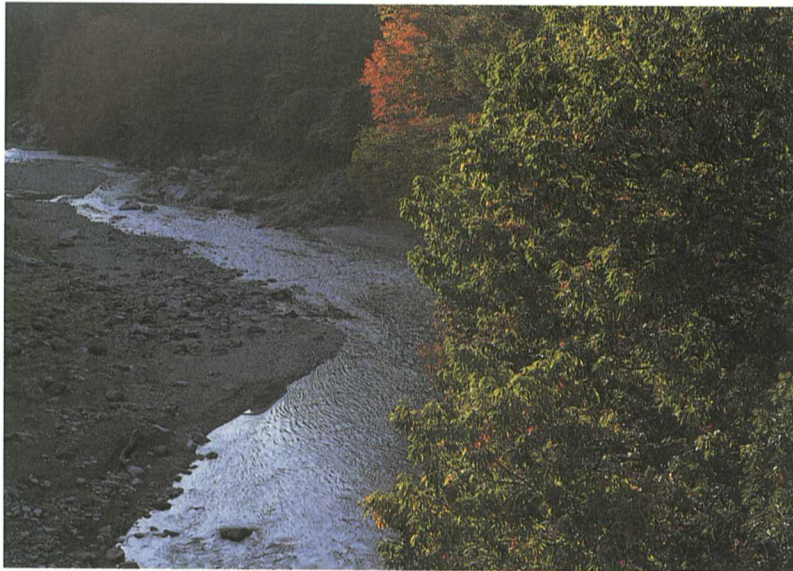
父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にし

そうだ。立つて、父のところに行つて、こう言おう。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。』」 (ルカ 15・17～18)

そこで彼は家に帰ってきました。まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、走り寄って彼を抱き、口づけしました。息子が『お父さん。私は罪を犯しました』と悔い改めて許しを乞うと、父親はしもべたちに言いました。

急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。……食べて祝おうではないか。この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。 (ルカ 15・22～23)

その時、彼は父親の愛の語りかけを全身で聞いた



のです」。もしあなたに神の声が聞こえていないとしたら、あなたは神から遠いところにいるのです。あなたは神のところに立ち返る必要があります。誰でも、自分が神から遠く離れていると感じた時には、すぐ神のところに戻らなければなりません。そうすれば間違いなく父なる神の声が聞こえます。

神の最後のことを聞いて

私がこれからお伝えすることは大変重要なことです。もし「神が沈黙している」と思うようなことがあれば、次のみことを聞かなければなりません。

神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られました。が、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。

(ヘブル 1:1-2)

御子とは、イエス様のことです。このイエス様は、「人となられた神のことば」であると聖書に書かれています。

ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。

(ヨハネ 1:14)

私たちがことばを発する時、それは息とともに消え去ります。しかし天地を創られた神はことばを、神からの消え去ることのない語りかけとして示されました。上の聖句にある「人」とはイエス様のことであり、イエス様から出ることばは、神の最終的なことばだという意味です。その最終決定であるイエス様のことばをあなたが受け入れないのなら、もはやそれ以上、神にはあなたが言うべきどのようなことばがあるでしょうか。「なぜ神は沈黙しておられるのか」と人々が文句を言う時、私は次のように答

えます。「あなたがたが神の最後のことばであるイエス様を受け入れないのであれば、神はもはや、あなたがたに何事も語ろうとはしません。イエス様を信じ、心に受け入れなければ、何も始まらないのです。どうかぜひイエス様を受け入れてください」と。

「神様のことは信じているけど、それがイエス様だと言われるとちょっと」という人々にもよく出会いますが、イエス様は私たちにとって「肉となられた神の最後のことば」なのです。このことをさらに説明するために、イエス様のことをもう少しお話ししたいと思います。ルカの福音書5章には、次のような記述があります。

さて、イエスがある町におられたとき、全身らい病の人がいた。イエスを見ると、ひれ伏してお願した。「主よ。お心一つで、私はきよくしていただけます。」イエスは手を伸ばして、彼にさわり、「わたしの心だ。きよくな

れ。」と言われた。すると、すぐに、そのらい病が消えた。

(ルカ 5:12-13)

当時、らい病は感染しやすく、不治の病であると考えられていました。らい病人は人里離れた所に隔離されました。そのらい病人がイエス様を見て、身を投げ出して「私をきよくしてください」とお願いしたのです。彼はイエス様を一目見て、すぐに自分の救い主であると悟ったのです。ですから彼は、救い主であるイエス様の前に泣きながら自分の惨めさをさらけ出し、「私の人生は絶望的です。イエス様、どうかみこころでしたら私をきよくしてください。助けてください」と訴えたのです。

私たち人間はみな、このらい病人のようにイエス様の前に自分の惨めな姿をさらけ出すべき存在です。ところで、イエス様はこのらい病人に、どう対応されたのでしょうか。病に犯され変わり果てたらい病

人の姿をご覧になったイエス様は、すぐに彼の頭にさわられました。それを見ていた群衆は驚きました。当時から病人に手を触れるなどということはありえない行為でした。しかし、イエス様は平気でこのらい病人にさわられたのです。私たちはこの記述から、救い主イエス様にとってはどのような汚れも、忌み嫌うべきものではなかったということを知ります。イエス様はその御手を、らい病人の頭に置かれたのです。これがイエス様なのです。あらゆる時代の奇跡そのものののです。イエス様はいつも、一人ひとりの平凡な人間に対して、次のように言ってくださいます。「わたしはあなたを贖った。あなたはわたしのもの」。そして、罪と汚れで苦しんでいる人に対しては「きよくなりなさい」と言われるのです。

私たちは罪、重荷、病、苦痛、生活難の中にあってうめいている存在です。そんな私たちに対して神は、イエス様を通して愛を示されます。イエス様は

人の姿をもつ「神のことば」です。神は沈黙しておられるのではなく、その声は、聞く耳さえ持てば、はつきりと聞こえてくるのです。

イエス様は、罪もないのに私たちの身代わりとなって十字架につけてくださいました。その時、十字架の周りを群衆が囲み、イエス様を見上げていたのです。私たちもこの群衆の一人として、十字架のもとに立とうではありませんか。そして十字架につけられたイエス様を見上げてください。いばらの冠をつけられ、あざけられ、ののしられ、傷だらけになったイエス様を見てください。そしてこのお方に尋ねてみてください。「なぜあなたは十字架につけられたのですか」と。イエス様はお答えになります。「あなたが、神に対して負い目、借りがあるからです。あなたが神を拒んで地獄に行き、耐えられない永遠の苦痛をもってその借りを返すか、それとも、わたしが十字架で血を流した代償としてあなたを罪から

贖い出さか、そのどちらかしか道がないのです。誰かが罪の代価を支払わなければならないのです。だからわたしがあなたに代わって犠牲となるのです。このことをよく考えて、わたしを信じなさい」と。

私は幸いにして、若い時にこのことを知ることができました。私たちの罪の身代わりとなってくださったイエス様。イエス様はそれほどまでにして私の罪を取り去り、赦してくださいました。私の身代金を払い、主なる神との和解をさせてくださいました。

ですから私は、十字架のイエス様の足もとに私の心を置き、次のように礼拝し、賛美します。「十字架の上で私に代わって死んでくださったイエス様。私はあなたに私の身と心をお捧げします。私のためにいのちを捨てて犠牲となってくださったイエス様！」

十字架にかかって死なれた後、イエス様は墓に葬られました。そして三日の後に、墓は空になりました。一度死なれたイエス様はよみがえられて、マゲ

ダラのマリヤをはじめ、多くの信徒の前にその御姿を現わされました。トマスという疑い深い弟子には、ご自身の十字架の傷跡を彼の手でさわらせ、たしかにイエス様だと確信を持てるようになさいました。トマスはイエス様に言いました。「私の主。私の神」と。新約聖書でも核心をなすイエス様のよみがえりについては、ヨハネの福音書21章をはじめ各福音書に記されていますので、ぜひお読みになってください。

イエス様は死者の中からよみがえられたのです。

あなたのために死んでくださったイエス様は、よみがえり、天に引き上げられ、神の右の座について、永遠に生きて支配しておられます。そしてイエス様は、神のことばそのものとして、今もあなたを呼んでおられます。あなたがイエス様を受け入れるかどうか、そのことはあなたの人生を大きく決定づける問題です。

神は決して沈黙しておられるのではなく、いつもあなたに語りかけておられるのです。そのことばと

は「イエス様」そのものなのです。それは、愛、恵み、憐れみを意味しています。

私は戦争の時代、ナチスの刑務所に入り、激しい爆撃を経験しました。それは悲惨なものでした。爆撃の最中には、私の周りに八十人以上の死体が転がっていました。兵士だけでなく女性や子どもも死んだのです。私はあまりの恐ろしさに心の中で叫びました。「神よ。あなたはどこにおられるのですか。なぜ沈黙しておられるのですか」。その時突然、次の聖書のみことばが私の頭に下りてきたのです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。
(ヨハネ 3・16)

神ご自身が、私の絶望した心の中に、このみことばを語りかけてくださったのです。そのとき、私の心の中にはゴルゴタの十字架がそびえ立っているの



がまざまざと見えました。そこで神ご自身が、私たちのためにご自分のひとり子の血を流してくださいましたのです。私は、神を理解することはできません。また、なぜすべての罪をお赦しくださるのかもわかりません。しかし、神の愛を証しする灯台が厳然として存在します。それがイエス様の十字架です。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。
(ローマ 8・32)

使徒パウロは、確信をもってこのように言いました。イエス様の十字架の贖いのみわざを信じ、自分の罪を告白し、イエス様に従って生きていくことを決意し、口で言い表した者は、神を無視し敵対する者の群れから離脱し、「神と和解した者」となり、罪

と死の世界から「いのちの世界」へと移されるのです。この回心を経験すれば、この世のあらゆる出来事は、もはや問題ではなくなるのです。

私の子どもたちがまだ幼かった頃、彼らは私が毎日していることのすべてを理解することはできませんでしたが、それでも私を信頼してくれていました。同じように、私もイエス様の十字架によって救われ、それを信じ、神の子どもとなったことを知った時、天の父なる神を真の父として心の底から信頼することができました。天の父なる神、主は、すべてにおいて私たちに正しいこと、最善のことをなしてくださいます。私たち信者はそのことを信頼していますから、生きていくことへのあらゆる疑問や惑いは消え去ってしまうのです。このようにすべては、あなたが神のひとり子イエス様を受け入れるかどうか、にかかっているのです。

最後にもう一つ大切なことをお伝えしておきます。

神の沈黙は、あなたを招く呼びかけ

神がこの世の不条理なこと、理解しがたいことを容認しておられる理由について、あれこれ議論することは終わりがありません。私たちは、大きな問題が自分に降りかかってきた時に、初めて神の問題を深刻に受け止めることができるようになります。人生の中で絶望的な暗闇の状態に置かれた時、私はいつも、イエス様の十字架によって脱出の道を見出すことができました。あなたがもし絶望的な状態に陥った場合、大切なことは「なぜ？なぜ？なぜ？」と問うのではなく、「何のために？」と神に尋ねることです。これに関して最後に、私が実際に体験したことを一つお話ししましょう。

数十年前に、私がある鉱山労働者の間で牧師を務めていたとき、大きな落盤事故が起きました。一人の鉱山労働者の腰の上に石が落下し、彼は不幸に

も下半身が麻痺してしまいました。回復の望みはありません。ある日、私はこの人を訪ねたのですが、部屋には酒のビンが散乱し、私が入って行くと彼は神に対する恨みつらみを叫び始めました。それはまさに地獄の状況でした。私は、無言のまま出て行くしかありませんでした。私はこのことを聖書集会に参加している抗夫の友人に伝えました。すると一週間後に、この麻痺状態になった人が車椅子に乗せられて、聖書集会に連れて来られたのです。そこで私は彼にイエス様のことを話しました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

(ヨハネ 3・16)

私は彼に、イエス様は信じる者が誰一人失われる

ことのないように願っておられる、と伝えました。彼はそのとき初めてイエス様のことを聞き、突然、一筋の光を見たのです。

三ヵ月後には彼は主イエス様のものとなっていました。すべては新しくなりました。恨みつらみの怒鳴り声が響いていた彼の家には賛美の歌が響くようになりました。散乱した酒ビンは消え、机の上には聖書が置かれました。妻と子どもは元氣を取り戻しました。彼が亡くなる前に私はもう一度訪ねましたが、この時のことは決して忘れません。彼は次のように話してくれたのです。「私の人生がイエス様のものとなってこのかた、罪の赦しを得てこのかた、神の子どもとされてこのかた、毎日がクリスマス・イブのようなのです。ブッシュさん、私はもうすぐ死ぬような気がします。そうすれば、神様の前に立つのですよね。しかし、私は死ですべてが終わらないことを知っています。私は永遠の中で、神様の御

座の前でひざまづき、神様に感謝します。私の腰の骨を砕いてくださったことを。あの事故が起きていなければ、私は、神様を知らない人生、神様を拒んだ人生を、ひたすら永遠の地獄に向かって生きていたのです。神様が、私を救うために愛をもって介入してくださり、腰の骨を砕いてくださったことによって、私はイエス様を見出すことができました。イエス様によって私は神の子どもとされました。そのことを心から感謝したいと思います。『麻痺状態でイエス様のものとされ、神の子どもとされる』ほうが、『二本の健康な足を持つていても、永遠の地獄に投げ込まれる』より、はるかにいいと思います」

これに対して私は答えました。「神様は、あなたに大変な苦しみを与えました。初めあなたは、『なぜ神様は沈黙しているのか。神様はどこにいるのか』と文句ばかり言っていました。けれども、今は何のために神様がその苦しみを与えられたのかを

理解なさいました。その事故は、あなたをイエス様のみもとに連れて行き、それを通してあなたが父なる真の神のみもとに導かれる、まさにそのためだったのですね」と。

私たちは神に「なぜ」と尋ねるのではなく、「何のために」と尋ねるべきなのではないでしょうか。私たちの人生の苦しみは、イエス様を通して神が私たちをご自分のみもとに連れて行かれるためなのです。次のような賛美があります。

父なる神よ。どうか私をイエス様のみもとに導いてくださいますように。御霊が私の心に住んでくださり、私の思いや考えを支配してくださいますように。神様の平安を味わい、感じる事ができますように。そして、心から賛美できますように。

あなたもこの賛美に加わってくださいることを、心から私は祈っています。

